



和名倉百年の森

百年の森づくりの会 発行

新たななる始動

百年の森づくりの会 会長 内藤 勝久

念願の埼玉大学「植林授業」が去る8月11日から13日まで荒川源流の中津川区を中心に行なわれ、留学生を含む16名の学生が受講しました。講座名は正確には「森林トレッキング」でしたが、内容は水源の原生林をトレッキングして水源林の多面的機能を学び、峠越えの昔の通学路を歩いて山村の子供たちに思いを馳せ、大鎌を振るって下草刈りを体験し、往時は山中の街としてにぎわった鉱山の跡地を訪れて鉱山の盛衰を知り、なめこ工場を見学して山村の産業の一端に触れといった具合に、まさに大学の授業に相応しいものとなりました。日曜日にもかかわらず出社して、企業秘密に触れるのではないかと思われるほど詳細な説明をしていただいたなめこ工場の社長さんの、暖かなまなざしには埼玉県唯一の国立大学の学生に対する大きな期待がこめられていました。

感謝されました。また秩父市からは送迎バスや旧大滝村歴史民俗資料館につき便宜を図っていただき、埼玉県や東京大学秩父演習林からも職員の出遣があり、授業の内容もいっそう充実したものとなりました。さらに今回の授業の大きな目的である地域の活性化でもささやかながら貢献できたと思います。地元の山村の活性化こそ森林の健全な育成の鍵であるとの考えによるもので、古い通学路の整備費用、ガイド料、入山料など地元の経済をわずかながら潤すことができました。特に私有林を利用しての試みですが、これを機に地元で育てたい苗木の購入、山料の支払いが初め、手入の行き届いた民有林は、材木を切り出さなくとも入山料という収入源が確保できることになり、それが原資となって林業従事者の雇用を生み、森林の健全な育成がはかれるという好循環を生むことになり、参加者が多くなれば入山料は林家の大きな収入源になるものと思えます。今回の授業に対する埼玉県や秩父市の期待は大きく、埼玉県は埼玉大学と協定書を

「この活動を通じて、山村の活性化に貢献したい」という当初の熱き思いを早期に実現する新たななる始動になるものと確信しています。

育成がはかれるという好循環を生むことになり、参加者が多くなれば入山料は林家の大きな収入源になるものと思えます。今回の授業に対する埼玉県や秩父市の期待は大きく、埼玉県は埼玉大学と協定書を



2006年 第4回荒川源流森づくり体験
 (秩父市中津川 県有林)

山吹沢の森づくり



目次 CONTENTS

巻頭 新たなる始動	1
山吹沢の森づくり	2
森と共に春から夏へ	4
秩父の森の苗づくりに参加して	6
集中講義 森林トレッキング	8
ブナの豊凶を旅する	10
百年の森づくりによせて	12
理事からのひと言	
加藤文庫より	14
活動のご案内	15



撮影：スタジオ楽 鈴木康之（会員）

5月7日
新緑の秩父

ブナ林を歩く

秩父ブナとの出会い

会員 郡 寛

百年の森づくりの会主催の公開講座「新緑の秩父ブナ林を歩く」に友人に誘われ初めて参加しました。

すがすがしい新緑の木々や山々を眺め、東京大学秩父演習林技術職員の方の説明を聞きながら、ゆっくり散策しました。一つ一つの木や草花の名前、生態、取り組んでいる試験、土壌をつくり水を育むブナ林、鹿に食べられる悩みやその対策などを教えていただきました。

芽吹いたばかりの草木のみずみずしさ、とくにブナの可愛らしい双葉の赤ちゃんが斜面に群生している様子は、「こんにちは」と話しかけているようで感動しました。

そして、5月20日の荒川源流森づくり体験では、「山吹沢の森づくり」にも参加しました。ブナ・ミズナラ・カ

エデ・モミジの植林作業を73歳にして生まれて初めてやりました。若者・老人・家族連れ約70名の人達が、専門の方から手順を教わり、雑草を取り除き鍬で穴を掘って600本の苗を植え、さらに防護ネットを一本一本に被せる作業です。私も10本位植えました。5年・10年・50年後に、鹿に食べられないで大木に育って森になって欲しいと願いつつ、山はいいなあ、来るところだなあと心癒され、早速入会しました。

本当の森の

豊かさにふれて

会員 吉田 兼 紀

エコサロンの初めての野外企画「新緑のブナ林を歩く」が行われました。広く会員を募集し、秩父の豊かな森、新緑のブナ林を歩いて、爽やかな森の息吹を気軽に感じてもらうというイベントです。果たして何人の方が応募してくれるのか。前日の大雨の天気予報からキャンセルもあり、結果的には

14名が参加しました。場所は秩父市大滝入川地区の東京大学秩父演習林。案内してくださる講師は同技術職員の大村和也さん。

当日は晴れ間もあり、林内を歩き初めてすぐに目にするのは、萌えはじめたばかりの若葉の競い栄え。芽吹き、若葉の頃はそれぞれの樹が、一年中で最も顕著にパフォーマンスをアピールしているように見えます。落葉広葉樹の混生している自然林の林道沿いを歩き、大村さんの説明を聞きながら注目していると、樹種の見分けのつかなかった多くの参加者にもブナとイヌブナがもう見分けられるようになりました。イヌブナはこの森にたくさん生えていることが分かります。道端

や林道法面のいたるところに今春発芽したばかりのイヌブナの赤ちゃん、さらに2年目の稚樹、3〜4年目の稚樹もあちこち生えています。いやあ、この森は実に生き生きしてるなあと嬉しくなりました。また、カエデの種類も多く、大村さんの説明のおかげでカエデにいろいろな種類があることを知ることができました。この葉の形はイタヤカエデ、この樹肌はウリハダカエデ等と見分けていきます。カエデの稚樹もそちこちでしっかり育っていました。

林内を進み、広葉樹発芽密度試験地、針葉樹植林試験地、全国ブナ種育苗試験地なども見せていただきました。林道脇にはいろいろな種類の草花が生え生えと自生しているのを観察し、秩父の森の植生の多様さと世代交代の確かさを肌で実感できて、心地よい体験となりました。



大雨の天気予報にも関わらず14名参加。



東大演習林技術職員大村さんの解りやすい説明に聞き入る参加者

7月23日～24日 山吹沢下草刈り作業

教え子とともに参加して

会員 守谷裕之

食事の用意からキャンプ場の手配、下刈りの準備、バスの手配などいつもながら大変お世話になりました。子供達は大変貴重な体験ができ、何か自分では分からないと思いますが大切なものを学んだと思っています。

卒業生も2名参加し、こんな嬉しいことはありません。N君は心臓が悪く、現場まで行くのが精一杯。下刈りどころではありません。確か夏の下刈りは毎回参加しているのでこれで3回目だと思いません。大きな悲鳴を上げるほどの大の虫嫌い。それでも参加しました。K君は高校の山岳部の部長を務めています。味にうるさい彼はこれはうまいとヤマメのムニエルに感動していました。下刈り作業も板に付いてきました。本当に頼もしく感じられ、これからが楽しみです。

後片付けやおにぎり作りなど子供達も少し手伝う機会があり、とても良かったと思えました。子供をお客さん扱いするのは良くないし、ある程度の仕事は充実感も得られると思います。下刈り作業は子供ですから大いに遊び感覚が良いと思います。きつい作業に飽き、集中がとぎれてしまいました。行く前には「みんな、半日ぐらいい思切り働こう、ただ飯食いにならないように頑張ろう！」という合言葉も空しくなってきました。今になって、何故下刈り作業が大切か話しておけばよかったと反省しています。以前会員の方にごこまで来ただけでも偉いと言われ、多くを期待してはいけなかつたと思返しました。

前夜の準備交流会ではおいしいお酒に、取り立てのヤマメとイワナ、それにその骨酒。お酒を飲みながら、七十二歳になられる星野さんの活動を聞いて本当に山を愛している人なんだと思いました。また作業の時必ずお会いする寄居の石坂さん、ゆっくりとお話をしたことはありませんがこの方も黙々と草を刈り、ご自分の鉈を持ち本当にかっこいい人だと感じています。



中学生による生長観察
(4人1組でリボン付け、測定、記録、刈払い)



5月植林作業時に仕上げられなかったシカ柵を完成



大鎌の使い方、刃物を扱う上での注意を中学生に指導する石坂さん

第十八回 和名倉植林ワーク

5月27日～28日

和名倉山仁田小屋尾根市有林(旧大滝村市有林25林班)標高1500mで、昨年に引き続き日本大学より提供されたブナの苗(冷凍保存処理)を植林しました。尾根西側のカラマツ人工林の林冠ギャップに林床のスタケ約10m四方を刈り払い、5ブロック81本を植林。乾燥を抑えるため根回りに多目の敷きワラを施し、山吹沢でも使用したシカ防護ネット「くわんたい」を設置。ミズナラの苗20本と混植しました。また標高1150mの仁田小屋周辺にも19本を植林しました。

和名倉南側斜面での植林活動は、過去に営林署でも実施されたことがありますが、十分な実績がえられない難しい山域といわれています。2001年からは始められた和名倉のブナ植林事業も、冷凍保存苗の採用などにより活着率や作業性の向上が見られるようになりました。今年から育苗が始まった秩父産イヌブナの苗の生育とその植林が待たれるところです。秩父におけるブナの生態調査とともに、和名倉のブナ植林活動を総合的な視点から検討していきたいと思えます。



昨秋、秩父の山々も豊作に恵まれ、たくさんのおんぐりを拾うことができました。また、山には、たくさんの苗が芽吹きました。

秩父の森の「苗づくり」に参加して

会員 並木利夫

今年会として苗づくりのワークを6月～7月にかけて6回計画されました。そのうち参加できた3回について作業の内容を記したいと思います。

6月11日(日)

秩父二中での苗づくり作業

9時に西武秩父駅に集合し、会場の秩父二中に着くともう既に作業は始まっています。前日に中津川で採取した実生苗をポットに植える作業で秩父二中の生徒が中心となって市川先生(正智深谷高校)や島崎さん(秩父二中テニス部指導者)夫妻の指導のもとすすまられています。空の牛乳パック(1リットル用)の底に水抜き

の穴を数ヶ所あけ、これに腐葉土を混ぜた土を入れながら山採りの苗を植えるという作業を手分けして手際よくやっていました。牛乳パックはビニールポットよりも丈が高くミスナラのような直根が長いものを植えるのには適しているように思われます。牛乳パックは以前から計画的に集めていたのか150箱近くあり、他にビニールポットにも植え、ブナ、ミスナラ合わせて600本余りを午前中に植え終えることができました。植えたポットは校庭の隅にまとめて置き、倒れたりしないように支えの枠を作ります。生き生きと作業をする生徒たちをみて、生徒たちは毎日登校する学校の片隅に自分が植えた苗がすくすくと育つ様子を観察して一層苗づくりへの関心が高まっていくのではないのでしょうか。

6月17日(土)

実生苗の山採りと植え付け

集合場所の西武秩父駅を9時過ぎに出て中津川へ向った。中津川のオートキャンプ場に10時ごろ着いた。この

キャンプ場の一角に昨年秩父の山で採ったブナの種子(おんぐり)を播いたが、この春の遅霜で殆んどが枯れてしまいました。この日はこの近くの河川敷で自然に生えたブナの苗を採取することでした。野澤さんはもう作業に入っていて遅れて着いた我々も河川敷へ入り大きなブナの木を目当てに苗取りをはじめました。大きな双葉を開き、本葉の出かかったものや本葉が一枚か二枚出ているものなど場所によって成長に差はありますが、生えている所にはとにかく足の踏み場もないほどビッシリと生えています。この採取は県の許可のもと行っていますが、河川敷に生えたものはこれから大雨などで川の水かさが増せば流れ去ってしまうものです。これを利用して苗を育てようという試みです。苗の採取は午前中で終りにして、昼食のあと長瀬の苗畑へもどり、ビニールポッ



牛乳パックを利用したポット苗の作り方を指導する常務理事の市川さん

森づくりの一役



牛乳パックで苗木育成 秩父二中

埼玉新聞で紹介された秩父二中の苗づくり



寒冷紗の下にならべられたイヌブナの苗（長瀬）



土をつくりポットへ入れ、苗を移植（長瀬）



山採り苗を運ぶ
並木さん

トへ植え付けをした。植え付け作業は流れ作業で黒土に腐葉土を混ぜる人、ポットに土を入れる人、苗を植え付ける人、植えたポットを苗箱に入れ畑に並べ置く人と分れての作業です。約1000本余りを植え、その上に寒冷紗の日除けを作って6時半ごろ作業が終了しました。ここの苗畑は昨年から山採りの苗を植えたり、ドングリを播いたり利用してきましたが、今年はおとして自前の苗づくりが大きく進展してきていると思います。和名倉山への第一回植林の時は東大演習林から分けてもらった苗で、丈が2m以上もあり、重さが30kg近くもある大苗で、植林地まで担ぎ上げるのに苦労しましたが、この苗づくりが成功すれば2〜3年後には植えるのに手ごろな、そして活着率がより高い苗が大量に生産されることになり、和名倉山への植林作業も飛躍的に伸びることになると思います。

ど集って9時過ぎから作業に入りました。昨年の秋に採取したブナの実（ドングリ）を中津川の畑と合せて約30000粒播きました。ここの畑にはそのうちの大半が播かれました。春の遅霜でやられたものもありますが、山採りの苗よりもすっかり育っています。今日はこの苗をポットに鉢上げする作業です。腐葉土を混ぜた土をポットへ入れ苗床から抜いた苗をそこへ植えるという一連の作業で、お昼をはさんで午後3時ごろまでには約1000本の鉢上げができました。前回の時と同じく日除けの寒冷紗を覆い、作業を終えました。苗床にはまだ沢山の苗が移植を待っていて、夏を越して秋の作業へと引き継がれていくことになりました。また、その頃には秩父の山々は実りの秋を迎えます。多少豊凶の差はあってもドングリの実が実ります。そしてドングリ拾いから始まる苗づくりが次のサイクルへめぐっていきます。

7月1日（土）

長瀬苗畑での苗づくり

この日長瀬の苗畑に会員が17名ほ

百年の森づくり双書 No.1
ミズナラの

赤ちゃんの育て方

正智深谷高校の科学部の皆さんによる研究資料をもとに、ミズナラの苗づくりのための手引書をつくりました。A5サイズ4ページの小さな冊子ですが、4年前から取り組んできたミズナラの苗づくりの成果をまとめたものです。ドングリ拾いや牛乳パックによる苗づくりにご利用ください。当会では、このような手軽な手引書や森づくりのための調査・研究書を今後発行していきたいと考えております。皆様のご協力をお願いいたします。



第1回埼玉大学環境教育8月11日～13日

集中講義 森林トレッキング

指導教員 埼玉大学教育学部体育医・科学講座教授 野澤 巖



環境教育の拠点となった
埼玉大学秩父山寮

「環境授業」の構想力

百年の森づくりの会副会長

田島 克己

「環境教育」には様々なアプローチがありますが、はじめての植林授業の実施に当たり、受講生の安全確保を前提に、授業のねらいは次のように設定されました。

私たちの暮らしは、環境を抜きにしては考えられなくなっています。自然環境の中でも、特に森林がはたす役割は大きく、清らかな水を育み、国土を保ち、地球温暖化の原因とされる二酸化炭素を固定するなどさまざまな働きを持つといわれています。私たちは、その森林の姿をどこまで知っているでしょうか。

埼玉県西部にひろがる秩父山地は、豊かな森林に恵まれています。集中講義の一日目は、東京大学秩父演習林内の原生林を歩きながら、ほんものの森林の姿にふれることに

します。外見からは緑の葉におおわれた森林も、その中にはいると、さまざまな種類の

樹木によって形づくられています。それらの木々の名前をひとつでも覚えて、自分の好きな木にしてください。90年の歴史を持つ東京大学秩父演習林内には、貴重な森林が残されています。

秩父には、森を守り森と共に生きてきた人々の暮らしがあります。二日目の講義は、中津川集落から小さな峠をこえる昔の子供たちの通学路を歩きます。日本列島のへそといわれる秩父地方は、良質な金や鉄、亜鉛、石灰などさまざまな鉱物を産出してきました。小倉沢地区は、鉱山に働く従業員や家族で、最盛期の1960年代には3000人の従業員が働く鉱山の町でした。映画館やスーパーマーケットもあつたほどです。中津川分校を卒業した子供たちは、集落の北にある山鳥峠をこえて毎日、小倉沢の中学校に通っていました。子供たちは、どんな思いで山道を歩いていたのでしょうか。私たちも昔の子供になつて、歩いて見ましよう。また、子供たちは、親といっしょに植林や草刈を手伝い、山の暮らしをささえてきました。通学路歩行のあと、県有林の植林地で下草刈りの作業を体験します。大きな草刈り鎌を使うのは初めてですが、いい経験になるはずですよ。

最終日は、山の暮らしを支えている産業について考えてみましょう。私たちが食べる「きのこ」は、森の恵みのひとつですが、毎日さいたま市にも出荷されているナメコの生産工場を見学します。森林は、木材のほかにも私たちの毎日の生活に密着しています。味噌汁のなめこは、どのようにできるのでしょうか。大きな驚きと発見があるはずですよ。

授業の展開にあたっては、地元のスタッフや行政の大きな協力がありました。使われなくなつて久しい旧通学路を学生たちが安全に通れるように整備していただきました。小倉沢地区の事前調査では、旧小倉沢中学校に在職していた教師の同僚の方から情報をいただきました。下刈りの現場では、急な雷雨の雨上がりを待つ間、県農林副部長による農林行政のリアルな説明が、小さなマイクロバスを熱のこもつた教室にかえるものとなりました。

森林の大切さとそれを守る暮らしに直接ふれることで、単なる旅行では得られないものを学生たちは感じる事ができました。当初の授業のねらいは、様々な人々の繋がりを築きながら、多くの可能性に満ちたものとなりました。それをどのように活かし、深め、発展させていくのか。豊かな森林をもつ秩父での「環境授業」は、大きな可能性を得ることができました。

1日目 森を知る



2日目 森と暮らす



3日目 森の産業



激励して下さる栗原秩父市長



東大秩父演習林 才木さん



通路を整備した幸島 久さん



なめこ作りを語る山中敬久さん

「森林トレッキング」 に参加して

会員 荻野能理子

本年度新しく開講した「森林トレッキング」に参加してきました。女子学生のために女性スタッフが居た方が良かったので、配慮からお声が掛かりましたが、体力には全く自信が無く、反って迷惑をかけるのではと心配しながらの参加でした。

事前の打合せ会議が一度あり、スタッフの顔合わせと概要説明、内容の検討が行われました。私以外は皆さん顔見知り、現地の様子もご存知の方ばかり。一度も現地を訪れたことのない私は具体的なイメージが掴めず少し不安を覚えました。一方で内容は興味を引かれるものが多くあり、半ば受講生気分が当日が楽しみになりました。

いよいよ当日。初日のメインである東大演習林の原生林歩行は楽しみにしていたことの一つ。樹木の大きさ豊かさ、に圧倒されながら、個々の木々の説明に興味深く耳を傾けました。この時は、スタッフというより受講生気分。才木

先生の説明が所々届かなかったのがとても残念でした。演習林とはいえ学生さんたちにとっては慣れない山道なので事故を心配しましたが、何事も無くホッと一安心。瞬間に過ぎた1日目、お風呂(温泉)はもったのんびりと入りたかったという女子学生の声には、私も同感でした。

二日目の旧通路歩きは登山道そのもの。何でこれが通路なんだ!と思いつつ、昔に思いを馳せました。また今では廃墟になっている小倉沢地区の見学は、人社会の儂さを感じさせられました。そして雨で十分な活動が出来なかつた植林地の下草刈り。植林活動にささやかでも協力できればと思っていたので、残念でした。盛り沢山だった二日目の終わりはバーベキュー。山の幸に舌鼓を打ちつつ参加者の距離感が一気に縮まった夜でした。

そしてあつという間の最終日。三日間に出会った現地スタッフの多彩な顔ぶれに『百年の森づくり』が育んでいる豊かな人と人との繋がりを感しながら、とても得した気分が秩父を後にしました。

ブナの豊凶を旅する

会員 岩波靖夫

ブナの芽吹き

春が近づくと、堅くときしていたブナの芽は少しずつゆるみだし、赤みを増しながらふくらみ始める。やがて芽が顔をのぞかせ、黄色い粉をまぶしたような花を咲かせる。同時に黄緑色の新葉が開き、森全体が萌黄色に染まる。ブナの森が最も穏かな季節となる。

ブナの芽吹きはおよそ十日間位のできごとなので、この瞬間にめぐり合う機会は少ない。昨年、秋、玉原高原（*注1）を訪れた。この年はブナの大豊作とあって、林床にはブナの種が大量に落下していた。途中、リュックを下ろすと、はずみで種がバツと飛び散った。こんなことは初めての体験だ。帰り際、玉原センターハウスの田村さんに、芽吹き時の様子を伺った。「この春のブナ嵐はみごとだったよ。ブナの花芽がサラサラと流れ、辺りいちめんを黄色に染めた」と言う。

五月一日。はやる心を押さえながら玉原に飛んできた。残念、芽吹きには少し早かったようだ。今冬の記録的な大雪で積雪は百五十センチ以上もある。玉原高原はまだ白銀の世界だ。残雪を踏みしめながら、明るい木立の中を逍遙するのは実に楽しい。

いつもなら笹に遮られて入ることが難しいブナ林に、苦もなく近づける。胸高幹周り、五メートルのブナを発見。巨木ブナの根周り穴に入り「今年もよろしくね」と語りかける。そっとふれる樹肌のぬくもりを感じる時、心がなごみ、とても幸せな気持ちになる。

ブナの豊凶を占う

六月下旬。埼玉大学ワンダーフォーゲルのOB、OGの皆さんと白神山地を旅する。

メンバーは六十才から八十才までの十三名。然ヶ岳、天狗岳、藤駒ヶ岳に登る。藪漕ぎをまじえての山行は旧人練成合宿を思い起こさせる。学生時代のワンゲル生活はわずか四年間。不思議なことにテントを担いで、寝食を共にした山仲間の強い絆は、過ぎ去った年月を全く感じさせない。

初夏のブナの森は新緑から深緑へと表情を変えていく。今年の白神山地は雪が多かった。そのため、緑が一段と鮮やかでみずみずしい。ブナ林は細い稜線から山頂付近にまでのびていて、山肌はブナの木々で埋めつくされている。その中に身をおくと、体が緑に染まるようだ。

ブナの恵みをつけて咲く花たちに会うのも楽し

みのひとつだ。森の妖精シラネアオイ、ブナ林の花嫁さんサンカヨウ、木陰にひっそりと咲くサルメンエビネなど、色とりどりの花が私達を静かに迎えてくれた。

私は昨年と同じ頃、白神山地を訪れている。その時は、どの山に登ってもブナの実がびっしりとみのって、ブナ林全体が黒ずんで見えたほどだ。

二ツ森を源流とする赤石川のほとりに熊の湯温泉がある。宿の主人・吉川隆さんは、今でも冬には熊を撃ち、温泉経営の傍ら白神のガイドもしている。昨年、吉川さんにお会いしたおりに、「白神山地のブナは大豊作ですね」と話しかけたところ、「いや、豊作ではない」という。理由を尋ねると「ブナの発芽の時期に満月だったので豊作にはならない」というのだ。その時はマタギを伝承する吉川さんならではの言いまわしぐらいにしか考えていなかった。

が、どうも気になる。東北森林管理局では毎年、管内百四十五箇所ですべてのブナの結実状況を調査している。年末には集計結果がまとまる。頃合いを見計らって問い合わせると、数日後、調査資料が送られてきた。それによれば、白神山地周辺のブナは概ね「豊作」となっている。ところが調査の箇所ごとに目を通すと、地域によってかなりのバラツキがある。赤石川を管轄する鱒ヶ沢森林事務所の結果では「並作」。備考欄に「開花時に比べてシイナ率が高い」と記されている。そういえば吉川さんは「たと

え花が満開でも結実するとはかぎらない」とも話していた。

昨年、東北地方のブナは豊作と聞いていた。しかし、よく調べてみると並作や凶作の地域もある。

ブナの豊凶を占うのは容易ではない。

白い森の国 小国町

七月下旬。炊飯器とフライパンを車に詰めこみ、湯治の旅に出る。行き先は山形県の小国町。町内に入ると「白い森」の活字がすぐ目につく。この地方は豪雪地帯だ。雪の白とブナの樹肌の白をイメージして「白い森おぐに」と名付けた。小国町は飯豊連峰と朝日連峰に囲まれ、温身平（*注2）や角檜沢といった日本を代表するブナ林を有している。ブナ党にとってはあこがれの地である。

初日から降り始めた雨は止みそうにない。こつこつ日は地元の人達の話や聞き取りの機会となる。

小国町役場に勤務する舟山さんは九年前、小国のブナマップを作られた。予め情報を得ていたので面



豊作 - ひしめき合うブナの子供たち



朝日連峰・角檜沢のブナ
(根周り483cm)

会を申し込むと、気持ち良く応対してください。

「小国町のブナ林を見て廻りたいのですが」と尋ねた。舟山さんはテーブルに地図を広げ、原生的なブナの森、かつての炭焼き跡の二次林、木地師が育てたブナ林など、お勧めの場所を丁寧に説明してくれた。時を忘れて熱心に話をされる舟山さんは、本当に森が好きなんだと思う。

夕方には病院に勤める井上さんにお会いする。役場で飯豊のことなら何でも知っているからと紹介されていた。井上さんは飯豊連峰について、地質や気候、植生など様々な角度から話し始めた。ブナ林についても急斜面のブナと河岸段丘や平地でのブナの特徴を土壌の構造との関わりで説明をされる。印象的だったのは「山や森を線で調査する専門家が」といふ。しかし、私は面でもとらえる事になっている。一言だ。最後に、秩父地方でブナを植林していることに触れると、「ブナは天然更新に任せただけが良」と言われてしまった。一週間ほど温身平や角檜

沢を歩いてみると、ここではブナは自然にまかせたほうが良いと思わずにはいられない。幹周り三、五メートル、樹高二十メートル以上のブナがあちこちに林立している。林床にはたくさんのブナの実生が顔を出している。その大部分は秋までに淘汰され、運良く残ったものだけが育っていく。さらに林内を観察してみると、稚樹や若木、壮木が至るところで見られる。ブナは常に自らの力で世代交代の準備をしているのだろう。

かつて木地師たちが生業の場としていた森を訪ねた。森の恵みを活用していた山棲みの人達はどうな思いでブナと接していたのだろうか。歴史の重みを感じながら、誰一人いないブナ林を歩いてみた。クロモジやオオカメノキをかきわけ、中に踏み入ると上空ではブナたちが風に揺られ、何やらささやきあっている。「オーイ、俺も仲間に入れてよ」と声をかける。みごとに育ったブナの大木を仰ぎ見ながら、木地師たちは木を切るだけでなく、立派に育てる知恵をもちあわせていたと思う。

(二〇〇六 ブナの旅日記より)

*注1 玉原高原(たんばらこうげん)

群馬県沼田市の北端、武尊山の西山麓に広がる高原。ブナ林を始め動植物を観察する絶好のフィールド。

*注2 温身平(ぬくみだいら)

飯豊連峰の北東山麓に位置し、今年4月「森林セラピー基地」に認定。

百年の森づくりによせて 理事からのひと言

今年の総会で4名の理事が交代しました。いずれも各界で活躍され環境問題にも造詣の深い方々ばかりです。昨年前任者の後を受けて理事に就任された柴山登氏を含め5名の新しい理事の方々には百年の森づくりに対する抱負を綴っていただきました。

緑の生命力を子供たちに伝えたい

浅野 純次

前東洋経済新報社社長
子どものときのエピソードは誰しもよく覚えているものだ。小学校へ入ったころ、親から緑色は目と体に良いと言われて、できるだけ緑の田んぼや林のほつを眺めるようにしていた。効果はあったとは思えないが、「緑」との最初の接点だった。

母校の同窓会に宮脇昭さんを招いたとき、鎮守の森の話が始まって、工場や学校の周辺はおろか道路と住宅の間のほんのちよつとしたスペースに植栽するだけで緑がどんな大きな役割を果たすかまで、説得力と情熱に溢れた行動力に改めて感銘を受けた。実際に、母校がゴルフ場跡地に全学部を統合した際、宮脇さんの指導で植栽した。20数年経ち、文字どおり緑が溢れ返るつうつたるキャンパスになっていて、感動させられる。

この夏、西湖のそば、青木が原の端を1時間ほど案内してもらってゆっくり歩いた。植物が知恵を出

し合いながら種を守り続けている様はこれまた感動的だった。思ったほど大木がなかったけれど、聞いてみれば当然とも思えた。富士が爆発して流れた溶岩の上に堆積した厚さ1センチかそこらの土に木々が根を張り、横に張った大小の根は岩をがっちり抱え込むようにして倒れるのを防いでいる。地中深く根を張ることもままならない木々によって樹海が成立していた。

あちこちで感動させられるたちであるが、いちばん感動させられるのは生命力に出会ったときである。とりわけ緑の生命力は面白さに溢れている。そして、すばらしい書物も感動し楽しめる点で同じと感じるのは、出版事業に長年携わったものとしての強い思いである。今の子どもたちが、感動を失い、面白がることを忘れているのは、残念なことだ。緑を育てる運動（と読書推進運動）は、子どもたちをたくさん巻き込むことでより価値あるものとなるのではないだろうか。刷り込み現象ではないが、子どもときの体験、思い、感動は、一生を支配するはずである。

ささやかながら、そつした思いを「百年の森」の運動に生かしたいと思う。

「百年の森づくりの会」に期待するもの

坂本 和穂

元日本信号株式会社副会長
私が「百年の森づくりの会」の会員になったのは6年前だったと思う。当時から、広報誌を読んだり内藤会長の話しをお聞きしたりして、素晴らしいボランティア活動だと思いつながら応援をしてい

たが、今回、はからずも理事にご推薦をいただき、益々、活動が身近なものに感じられるとともに、その責任の重さを感じるしだいである。

現在、地球を取りまく環境は悪化の一途をたどり、このまま10年20年と時間が経過すれば地球は壊滅的な打撃を受けるだろうとの話しを聞くにつけ、人類はすぐにも全力を上げて取り組みねばならない多くの課題を抱えている割に危機感が感じられない。非常にもどかしさを感じられてならない。

この100年間の地球の平均温度は0.6度上昇したといわれ、日本はその平均温度を上回り1度上昇しているといわれている。これは、主に人間の活動によって温室効果ガスの増加によるといわれており、特に二酸化炭素が最も大きな影響を与えているといわれている。ご存知のとおり、地球の温暖化問題に取り組むべく1997年に京都議定書が作られ、日本政府も調印した。これによって2008年〜2012年までに6%の削減目標を達成すべく諸計画がつけられ各方面で努力が始められた。これにより二酸化炭素の排出削減のための技術開発や企業活動も活発におこなわれたが、残念なことに、森林保護や植林推進活動はまだまだ足りないと言われている。そのため、「百年の森づくりの会」には大きな期待がかかっていると思う。そのための私案を披露したい。

- 一、教育改革の一環として、地球環境の未来を担う中、高校生、大学生に生きた学問として海をきれいに、山に緑を取り戻す活動を教育の場でできるように啓蒙運動をする。
- 二、会員増強1000人目標の実現に努力する。

森づくりは夢づくり、国づくり

柴山 登

NHKさいたま放送局局長

今年5月、『百年の森づくりの会』の一員として、秩父・山吹沢での植林活動に参加した。久しぶりに、山あり、谷あり、澄んだ空気ありの大自然の中で、『会』のメンバーやボーイスカウトの子供たち、ボランティアで参加した人たちと充実したひとときを共有することができた。空気がうまいし、木々の緑が眼にやさしい……。豊かな自然が日常生活の様々な束縛から解き放ってくれ、カサついた心をなごませてくれるのを感じた。そして何よりも木の苗を一本一本地面に植え、育てるという作業そのものが、目の前の荒れかけた山肌を、何年か後に緑豊かな森に生まれ変わらせるという夢を与えてくれた。何事によらず『育てる』という行為は、『将来に夢を託す』ということにつながると思う。親は子供に「こういう人になって欲しい」という夢を託しながら子育てという重労働を生甲斐に転化する。

森林の香り「フイトンチッドが『癒やし』の効果』をもたらすといわれるが、「人間の心に潤いを与えてくれる」というのは、森にとって本来持っている機能のごく一部ではない。森は、洪水の緩和や二酸化炭素の吸収、水源の涵養や生態系の保全、さらには土砂災害の防止等々といったわれわれの生活基盤を守るダイナミックな機能を持っている。言い換えれば、「森づくり」は豊かな自然を育むことであり、それは人々の心に夢と潤いをもたらす、併せて豊かな国土を形成することであるといえると思う。地球の『砂漠化』の進展が言われて久しい。続発

する短絡的な凶悪犯罪に人々の『心の砂漠化』を感じざるを得ない。荒れた土地に木を植え育て、森にするという作業を、若者はもとより中高年層にも広げることは、『心の砂漠化』の特効薬にもなり、地球の未来に夢と希望をもたらしてくれることになると思う。

マクロとミクロの環境保全対策

内藤 稔

内藤環境管理株式会社社長

百年の森づくりの会が和名倉山の植林を通して、荒川源流の環境保全活動を行っているとの事ですが、百年の事業、年間100本の植林を繰り返すと、100年目では1万本、子供が誕生して、25年目に次の世代の子供が誕生すると仮定すると、100年目には5世代目の子供が誕生する計算になります。世代を超越し、100年の時をかけるという事は、普段考えにも及ばない大きな事業が実現できるものだと感じました。

平均太陽年では、1年は365・2422日ですので、100年は約3、155、692、608秒になります。10の9乗秒と大きな数字です。さて、同じ環境保全対策の分野で仕事をしている私達の会社は、ミリグラム(10の3乗分の1グラム)から始まり、マイクログラム(10の6乗分の1グラム)、ナノグラム(10の9乗分の1グラム)、ピコグラム(10の12乗分の1グラム)と極微の世界になります。

ところで、私達の会社ですが、昭和47年(19

72年)設立時より、環境計量証明事業を主体とする化学分析専門会社として事業展開しています。化学分析の結果を報告するのみではなく、数値データが有効に活用されるために、数値データが何を語っているのか翻訳するとともに、データに基づく環境保全対策も具体的にお手伝いしています。

私達の手におえない対策も、関連技術を持っている当社のお客様と協力し合い相利共生のプロジェクトとして課題解決に努力しています。

ミクロの世界で仕事をしている私が100年の森づくりの会と出会うことで、マクロの世界を知り、二十一世紀を見つめ直すきっかけとなりました。

これからは、ミクロの世界から100年の森づくりを、お手伝いできればと思います。

壮大な計画が、世代を超越し発展しますことを心よりお祈り申し上げます。

森づくりの魅力

牧野 彰 吾

前浦和第一女子高校校長

私と「百年の森づくりの会」との出会い、常務理事市川氏の呼びかけに応えて行った、旧仁田小屋跡から和名倉山頂へと続く尾根筋の植生調査であった。和名倉山は「白石山」とも地図にはあるが、通称「白石山」は小鹿野町三山にある石灰岩の山に譲りたい。やはり、大滝のこの偉大な山塊は「和名倉」がふさわしい。和名倉は、一度は秩父側から登ってみたいと思いつつ、実現しない夢の懸案の一つであった。思いがけなくも、旧仁田小屋跡から山頂を目指すルートを、百年の森づくりの会が整備したと

のこと。昔、山火事に見舞われて東斜面一帯を焼け尽し、その後、焼け野原はスズタケ群落になって久しいという話は聞いていたが、実際に、この目で確かめるのはこの時が初めてであった。久しぶりに血が騒いだのである。

初めての山域は、ちょっとした神秘さがあり、怖いようである。でも是非とも登ってみたい不思議な衝動に駆られる。数年前、山梨側から将監峠を経て牛王院平から東仙波へ向かう途中、リンの峰から滝川の源流、槇の沢へ下降することがあった。サクランウ科のある貴重種Kの県内分布の有無を確認する植物調査行であった。人跡未踏とも思える斜面を下るに当たり、「生死を悪魔と契約することになるのかなあ」メンバーと冗談を交わしながら、緊張の高まりを抑えつつ確かな期待感をもって一歩ずつ急斜面を下ったのである。原生林の魅力はこの上なくすばらしい。林床のミヤマカタバミやミヤマスミシの地味で清楚な出立は自然の美しさを語るなものでもない。

百年の森づくりは今後、どのような活動を続けることになるのだろうか。山の持つ神秘的な魅力を後世に語り継ぎ、そして自然との付き合い方を授ける先達としてその役を務めようというのか。「森づくり」という言葉には、人を寄せ付ける心地よさがある。戦後このかた、燃料革命や生活様式の変化によって、日本の森林は放置され続けてきた。今、まさに百年の森づくりの会の会の出番にちがいない。一員に加わらせていただき、責の重さを痛感する。

加藤文庫より

理事をお受けしていただいている加藤司郎さんから寄贈いただいた数々の山の本が「加藤文庫」として百年の森テラスに整理されています。加藤さんは、秩父雁峠小屋をボランティアで維持管理されてきた経歴をお持ちで、秩父を知る手がかりとなる本を多く寄せていただきました。そのうちのいくつかをご紹介します。

町田良平著 奥秩父物語
まつや書房 1982年



著者の町田さんは、1910年(明治43年)旧荒川村白久の生まれ。大正から昭和にかけての秩父のくらしや子どもたちの遊び、山の仕事、動物にまつわる伝承や大血川の名の由来となった平将門伝説などが丹念にまとめられていて興味深い。山の人には、社会状況や世界情勢に鋭い観察眼をもつ人が多いが、昭和電工影森工場で働いた経歴のある著者も、農山村問題を多角的に見る目を持っている。農林業が割りに合わなくなった1980年代の文章であり、清らかな視野から問題をほりさげ、かつての良き慣わしを後世にのこすことを願う著者の誠実なお人柄がうかがえる一冊。

河野寿夫著 回想の秩父多摩
白山書房 1999年



河野さんは、1950年代後半に奥秩父の沢をよく歩かれ、ことに和名倉山を囲む沢や尾根を歩かれた記録は興味深い。山林火災や伐採開発される以前の和名倉

を知るお一人でもある。

石井光造著 心に残る山
白山書房 1993年



石井さんの著書は、この他にも、静かな山12ヶ月、白山書房1991年、「埼玉の山を歩く」さきたま出版社1994年など多数あります。1950年代から秩父を含む全国のお山々に通われてきた石井さんの温かみある文章は、山頂に至る心の軌跡を追うよう新鮮な楽しみを与えてくれます。なお、「心に残る山」の本の見返しには、雁峠山荘と手書きの文字があり、加藤さんの「雁峠文庫」の一冊ということになります。ちなみに石井さんは、百年の森づくりの会の会員。

大久根茂著 峠 秩父への道
さきたま出版社 2009年



本書は「秩父の峠」の続編として、三國峠、赤岩峠、鳥首峠など秩父を囲む17の峠の踏査記録。奥付から、著者の大久根さんは、埼玉県立民俗文化センターに勤務される歴史研究者で日本民俗学会会員。暮らしや産業と深く関わり、信仰の道ともなっていた峠道の考察を通して、秩父を知ることができます。秩父を代表する神社、三峰神社が長野県側にも大きな信仰圏を持っていたこと、秩父最奥の中津川地区が峠を介して群馬や長野と深い結びつきを持っていたこと、峠を介して外秩父から秩父夜祭に向かう人々の流れがあったこと、廃道になってしまった峠道からもかつての人の暮らしを知ることができるなど、興味は尽きない一冊。

活動のご案内

小・中学生参加可
10月14日(土) 採取場所検討中

どんぐり拾い

集 合 秩父鉄道長瀬駅 9:00 (解散: 15時)
持ち物 昼食・雨具

お問合せ先 野澤 0494(66)0315
nozawaya@athena.ocn.ne.jp

10月15日(日) 13:30開場・14:00開演
百年の森ふれあいコンサート **無料**

2006クラシックの夕べ

会場 皆野文化会館

合 唱 秩父高校音楽部・女声合唱団 コール四季
演 奏 桐朋学園大学 音楽学部OG

お問合せ先 野澤 0494(66)0315
nozawaya@athena.ocn.ne.jp

小・中学生参加可
10月28日(土) 秩父市中津川 山吹沢県有林

ブナとカエデの植林活動

集 合 西武秩父駅 9:00 (解散: 16時)
持ち物 昼食・雨具 / 宿泊希望の方は洗面用具・着替え
宿 泊 中津川キャンプ場 (29日有志による南天山などの山行を検討中)

お問合せ先 田島 048(864)6669 tajima@gol.com

11月5日(日) 10:00より15:00まで
百年の森交流会 **無料**
会場 埼玉大学百年の森テラス

秩父市の皆さんによる **秩父屋台囃子** 演奏 10:00より11:00

恒例の芋煮、大滝名物中津いも、パネル展示、ビデオ上映
気軽にお立ち寄りください。

お問合せ先 岩波 048(433)8353 iwanami@d2.dion.ne.jp



秩父屋台囃子
全国的に知られた「秩父夜祭」は、毎年12月2日-3日に行われ、秩父地方を代表する祭りです。この祭りは国の有形無形重要文化財に指定されています。この祭

りは、御神幸行列に6基の山車が曳行され150人からの曳き手によって街の中を進み山車の中では勇壮で豪快なお囃子が鳴り響きます。

健脚向
11月18日(土) ~ 19日(日) 和名倉山
第19回和名倉ワークと小屋じまい

集 合 西武秩父駅 9:00
持ち物 昼食・雨具/宿泊希望の方は洗面用具・着替え・寝 袋
宿 泊 仁田小屋
作 業 ブナの秋植え・生長記録・仁田小屋整備

お問合せ先 高岡 048(663)2152 wanakura2036@yahoo.co.jp

12月9日(土) 17:00より
埼玉大エコサロン 第2回勉強会 (終了後 懇親会)
会場 埼玉大学ソニックシティ校 (大宮ソニックシティビル4F)

講 師 市川嘉一 常務理事
演 題 「森づくりと苗づくり」
参加費 無料 (懇親会費5000円)

お問合せ先 石関 048(873)4307 aki7788@jcom.home.ne.jp





イタヤカエデ
(幹周り298cm)

会員募集

荒川の源流、秩父の山々はいのち豊かな森林におおわれています。森林を守り育てる活動にぜひご参加ください。

年会費：個人会員 2,000円 / 法人会員 10,000円 (2年以上まとめて払込もできます)

振込先：郵便振替 00140-0-555239 百年の森づくりの会

銀行振込 埼玉りそな銀行南浦和支店普通3835666 百年の森づくりの会会長 内藤勝久

現会員 (会員番号 氏名 住所) 2006.3.26 ~ 2006.9.25入会者

817河村義房 長瀬町/818 グリーンハウス・ウォーキングクラブ 代表 相澤 光 荒川区/819 矢部隆志 戸田市/820 近藤 哲雄 白岡町/821 阿久津和夫 前橋市/822 浅野広 視 杉並区/823 福島 理可 千代田区/824 福島秀海 千代田区/825宮崎 敬 三船橋市/826 吉田泰邦 秩父市/827 郡 寛 東久留米市/828 石川 公子 鴻巣市/829 高津宜由 さいたま市/830 彩の国いきがい大学25期校友会 会長 須田武 さいたま市/831 金子辰男 さいたま市/832 中村佳則 横浜

市/833 牧野彰吾 川越市/834 峰川 昇 船橋市/835 田島克己 さいたま市/836 渡辺信子 長瀬町/837 桐原忠信 笠間市/838 門倉利夫 横瀬町/839 若林 新一郎 横瀬町

和名倉百年の森 第12号 2006年9月30日発行

発行 百年の森づくりの会 内藤勝久
編集 百年の森づくりの会 広報委員会

百年の森づくりの会 事務局

〒336-0015 さいたま市南区太田窪 2 0 3 4 - 1
TEL : 048 - 885 - 6697 / FAX : 048 - 882 - 0245
e-mail : k.naito@naitohoken.co.jp
<http://www.geocities.jp/wanagura/>